

絵画の中のはきもの

語り部としての靴たち

見 — 真理子

こんなにゆっくりと母と会話したのは久しぶりのことで、こんなにじっくりと二人で絵を見つめたことも今までなかったように思います。

今年の夏、母は92歳で乳癌の手術を受けました。気づいた時には既に4センチ程の大きさになっていて左乳房を全摘出しました。高齢のため手術を受けさせることさえ躊躇しましたが順調に傷も癒え、退院後は母と二人の共同生活へと環境が変わり、私の制作現場も変更せざるを得なくなりました。

夜な夜な母のリビングルームに新聞紙を敷いてキャンバスと向き合う私の傍らで、絵の中に父の仕事場を重ね合わせていたのか、母の脳裏にはいろいろな思い出が蘇って来たようです。さっきのことは忘れてしまっても昔の記憶は鮮明で、これまで聞いたことのなかった話もぼつりぼつりと語り始めたのです。

母は家事の合間に歌舞伎の役者絵や花、猫などをよく描いていました。私が絵を描き始めたきっかけも母の影響です。そんな母が10代の頃、公募展に入選した経験があると聞いてびっくりしました。母の歩んできた道程は歴史そのもので、二・二六事件の夜、水戸から東京へ向かう隊列の兵士たちに食事を提供した話や、初めて東京に空襲があった日に飛んできた破片で腕に怪我をした話など、激動の時代を必死に生き抜いてきた体験が母の中には今も生々しく残っています。

今年は戦後70年ということで、戦争映像

を眼にすることが多く、修正されて鮮明になった画像は戦争の悲惨さをより強く伝えていきます。私が衝撃を受けた映像があります。それは夥しい数の靴の山、アウシュヴィッツ強制収容所に遺された靴たちです。“もの言わぬ物たち”から発せられる強いメッセージに痛みを覚え、ちょうど描いていた木型たちと重なって頭から離れなくなりました。

絵は描く者にとって鏡のようなもので、自分が感じたことが顕著に画面に映し出されてしまいます。母の病と向き合うことで、命の尊さと強さ、そして語り継がなくてはならない大切なものに気づき、「木型」に呼ばれるように筆を進めていたように感じます。

物置の中に眠っていたたくさんの木型の中に、「真理子」、「しず」（母の名前）と父の字で書かれた木型が見つかりました。母娘二人の分身のようなこの温かい塊は、これからもあれこれと語らいながら何かを発してくれる存在になりそうです。



語り部たち（あの日から）